

昭和五十六年度

大谷学会研究発表要旨

明恵上人の『夢記』

坂東性純

一

本年（昭和五十六年）は明恵上人が入滅されてから七百五十年目に当り、五月十八日と十九日の両日にわたり、御遠忌の法要が高山寺で盛大に執り行われた。この御遠忌記念に岩波文庫の一冊『明恵上人集』が刊行されたが、その中に初めて普及版としての上人の『夢記』が収められた。従来は、一般に『夢記』に接するのは、『大日本史料』（第五編之七）か、『明恵上人資料』（第二）等の専門書を通じてのみ可能であったが、今般高山寺所蔵の『夢記』十六篇が、万人の近づき易い文庫本の形で刊行されたことは慶賀にたえない。これによって、これまで噂のみ耳にしていたながら内容に接しえなかった多くの人が、じかに親しくその内容を知りうる機会に恵まれることになった訳である。上人自筆の挿絵も入っており、主要な言葉には、巻末に詳細な注も施されている。

高僧と夢との密接な関わりについては、他に法然、親鸞、貞慶等、ことに平安末・鎌倉期辺りに多く事例が見出されるが、鎌倉期の旧仏教を代表する明恵上人の場合、十九歳から五十八歳までのおよそ四十年にわたる永い間書き続けられた点にその比類のない特色がある。現存の『夢記』は高山寺所蔵のもの他に、畠山文化

財団、陽明文庫、京都国立博物館、施無畏寺、上山勘太郎氏ほか各方面に所蔵され、現在存在が確認されているものは、明恵上人の残したものの半分にも満たないであろうと言われている。高山寺本の現存の部分も年代的にまばらであり、ある時期（承久・貞応頃）に多く集中しているかと思うと、他の時期（元仁から嘉禄・安貞頃）のは全く見出されないというように、精粗も一様ではない。また明恵は『夢記』のみに夢を誌したのではなく、聖教の奥書や識語などにも記しており、また弟子の記した伝記等にも伝えられているものがある。そして、著わし方も『夢記』の場合、必ずしも年代を追って誌されているとは限らず、何年か前に遡って記憶しているところを記述している場合もある。現在各所に残っている断簡は年時未詳のものが殆んどである。歴史上著名な日記は枚挙にいとまない程数多く残されているが、明恵の同時代人としては、定家の『明月記』、兼実の『玉葉』等はその代表的なものといえよう。しかしながら日常の意識界を主とした『日記』を記さず、現実を超えた潜在意識を中心とする『夢記』を四十年近くにわたって書き続けた明恵の意図は、一体どのようなところにあったのであろうか。

御遠忌記念に京都国立博物館で催されていた『明恵上人展』には、『夢記』が多く陳列されていたが、その多くは意外に大きな紙面に書かれていたのが印象的であった。単なる心覚えのためのメモといった性格ではなく、当時の書簡の大きさに匹敵するものが大部分である。中には、法然上人来訪の夢を記したものは少々小さめの小冊子となっていたが、これはむしろ例外に属するものであった。高山寺に残されている明恵の手沢本で『夢経抄』と題する小冊子は、明恵自身が聖教中の夢に関する箇処の抜書を

集めたものであるが、その題名の脇に三首の歌が記されている。
すなわち

○カクシツ、イマハトナラムトキニコソクヤシキコトノカキモ
ナカラメ

○コロアラハノトカニ、ヲヘサクラハナノチノハルヲハイッ
カミルヘキ

○ナカキヨノハシメヲハリモシラヌマニイクソノコトラユメト
ミツラム

これらは夢に関する明恵の所懐・愛著を三十一文字に綴ったものと見られるが、その記録は公開を意図したものではなく、自己自身のためのものであったことが暗示されている。では、明恵にとって夢とはいかなるものであったのであろうか。『日記』より『夢記』を重視した明恵の心にとっては、現実よりも夢・瞑想の世界の方が優位を占めていたであらうことは確かである。周囲の物ごとへの執着心を惹き起す因となる五官の活動が、寂靜に帰した状態の心に映ずる世界こそ、明恵にとってまことなるものと受けとられていたに違いない。このことは、紀伊や高尾・榎尾・梅尾において、絶えず禪定の世界に入ることと心をかけていた明恵の生きざまに徴しても明らかである。瞑想状態において聞えてくる声なき声を神・仏の瞑意・さとりの世界からの呼びかけと受けとり、現実の自己はそれに従うべきものという絶対従順の姿勢が明恵にはあったのである。夢を神・仏の思召しの聞える場なりと受けとっていたのは、貞慶・法然・親鸞・惠信尼等明恵の同時代人に共通した心情であったが、明恵の夢にたいする態度には、幾つかの特徴が見出される。ここでは、その中の主なものを幾つかを拾い出し、少しく考察を加えてみたいと思う。

二

『日記としての『夢記』の性格』

明恵の『夢記』の内容は、必ずしもすべての記述が夢想の内容ではないことに気付かされる。中には明らかに、現実の心覚えと見なされる件りもかなり混っている。例えば、建永元年十一月、後鳥羽院から櫛(梅)尾の別所を賜わり、十無尽院と名付けたことや、同じくこの月の廿日から一週間にわたって九条兼実邸において宝楼閣供と称する真言の修法を行ったこと、そして、同月二十七日に梅尾に赴いたことなど、また建保六年八月十一日に梅尾を出て、十三日に賀茂の別所に移住したことなど、史料としての確實性に富む記述等を含む点に特色をもつものである。また当時活躍していた人物一五〇名以上の存在が確認されうるなど、貴重な史的文献としての側面をもっている。このように、『夢記』は現実と夢の世界の双方にまたがるものであるとはいえ、時には、直接の根本第一史料たる側面も有しているのである。

『日常的性格に豊んでいること』

『夢記』の内容は必ずしも神・仏・菩薩等の聖なる要素のみで成っているものではなく、むしろ日常的な経験内容をも豊富に含んでいる点に特色が見出される。『夢記』の中に現われるさきにも述べた同時代人の中には、文覚・上覚をはじめ、周囲の同法同行たちの他に、頼朝、政子、藤原公経、法然、貞慶等がある。直接の師であった上覚などは二〇回以上現われるのは、精神的影響の深さを示すものと思われる。また、古本尊の釈迦如来に手紙を書いたり、故郷の島に宛てた手紙を認めるなどの行状の伝えられる純粋で無邪気な心情をもち、また大自然の真只中で禅觀を修す

るのを常とした明恵に適わしく、その夢の中に現われるものは、太陽・月・星・海・石などの自然の物象から、人形、動物・鳥などさまざまな対象に及んでいる。すなわち、獅子・馬・猪・狼・犬・蛇・鼯鼠・鰐・蜂・虫等きわめて多彩である。それも記述のあとの夢合わせで、特定の如来や菩薩の象徴ないしは使いと解している場合が多く、それらの一々は明恵にとってはその都度意味の深いシンボルとして受けとられていたのである。

〔夢にたいする積極的な姿勢〕

明恵の前後の大部分の人びとの夢にたいする姿勢は、消極的な受身の態勢で終始したと言えよう。つまり、夢は単に向うから偶然の機会にやってくるもの、与えられるものといった受とり方がなされていたにすぎないと思われるが、明恵の場合は、『夢経抄』の例からも見てとれるように、密教の經典中に説かれている好相・夢想を積極的に獲得するための方法に若い頃から関心を寄せ、それらを忠実に実践し、かつそれらに通曉・習熟することによって、殊更なほからいを用いることなく、夢を獲得していたとさえ言いうる特色がある。長年の実習の結果、晩年には、未来の事象の予知や、周囲のできごと、相手の心中の洞察などに著しい能力を身につけるにいたり、同行らもしばしば驚嘆などに著しい能力を現している。これらの能力は禅観の深まりとともに自然に身に現われた現象であることは、『伝記』（巻上）にも「高弁が如くに、定を好み、仏の教の如くに身を行じて見よかし。只今に汝共も加様の事は有らんずるぞ。我は加様に成らんと思ふ事は、努々無けれども、法の如く行ずる事の年積るままに、自然と知らずして具足せられたるなり」という同行たちに語った言葉として記されていることからもよく察せられる。

〔夢の分析をしばしば行っていること〕

明恵が夢を見るのに適わしい密教の儀軌に従っていたことは、すでに見た通りであるが、明恵は、さらに一步進んで、時には夢の詳細な分析を行っている。夢の分析・解釈は、一般に、「夢合わせ」「夢占（ない）」「夢解き」などとして知られているが、明恵の夢の分析の特質は大抵、日常の人物・できごと・物体を、如来・仏・菩薩など仏の世界の消息に関連づけて解釈することであろう。たとえば、承久二年七月二十八日の禅観中に見た好相の一つとして、自分が一院（後鳥羽院）の御子となったことを記し、このことを「如来の家に生まる也」と解したり、あるいはまた、承久二年五月二十日の唐人形の夢の場合は、人間の女に変身したこの人形を「この女人は善妙である」と解釈するなどの事例が他にも多く見られる。この辺りに、日常性の奥底に仏界の消息を常に伺おうとしていたであろう明恵の夢に対する積極的な姿勢が見られるのである。これは、相互に相手を観音の化身と見た親鸞と恵信尼の場合に通ずるものと見られよう。しかしながら、好相を夢見する密教の儀軌を身につけ、得られた夢想を詳細に解き明して行く積極的な態度は、明恵の独壇場と見られる。

〔ありのままの記述のもつカタルシスの機能〕

明恵は禅観の中で見る好相・瑞相や、ふつうの睡眠状態で見る夢を強いて区別せず、一様な態度でそれらに向っている。さきに明恵の夢にたいする積極的な側面の模様を述べたが、一方消極的な記述の側面のもつ積極的意義を看過することはできない。明恵の夢の分析はすべてにわたって行なわれているものではなく、むしろ、割合は僅少である。しかし、夢見た対象を特定の如来・仏・菩薩・神等と結びつけて解している場合は比較的多いことに

気づかされる。今一つ注意せられることは、一生不犯の厳格な持律者というイメージとは程遠い女性に関する記述の意外に多いことである。さきの唐人形の場合、その変身した女性を善妙神と同一視する解釈を行っているが、女性の登場する十余りの夢で分析を行っているのは、この唐人形の変身の夢のみである。他の場合は、淡々と見た通りの模様を記しているのみである。例えば、建永元年（三十三歳）五月の、ある女房が鉢に白粥を造り、白芥子をまぜて箸で成弁（明恵）に食べさせた夢。同じ年の六月に殊勝なる家の十五、六歳ばかりの美女が白服を着て成弁を見ていた夢。また同年十二月、行法のため兼実邸に赴いた時、殿下の姫君と「以ての外に親馴の儀」をなしたこと、すなわち、姫君を横さまに懷き奉つてもう共に二人きりで車に乗って行った夢。また、承久二年十月（四十八歳）崎山の尼公がムカデのような大きい虫に手を刺された時、高弁が払い除けた夢。また、同じ頃、二人の顔長く色白の女房が明恵の気色よきことを上皇に申入れたところ、上皇も同感された夢。尚、例の唐人形の夢はこの年の五月頃見ている。また、この頃、五、六人の女房が明恵の所に来て親近した夢。さらにこの年の十一月頃、端嚴なる美女と一緒に居り、彼女は明恵に親しみ近づこうとするが、明恵は彼女を捨て去る。しかし、あとでこの女は毗盧舎那仏であると解した夢。更に年時不詳であるが、中嶋尼御前という女人と一緒に小さな馬に乗って川を渡ろうとしたが、馬が小さいので遠慮して、自分だけは腰迄水に浸りながら歩いて渡った夢等が記されている。これらが、女性を主人公とする明恵の夢の主要なるものであるが、印象深いのは、淡々として捉われのない書きぶりである。夢見たことに、大方は何の弁解も、解釈も加えぬまま記している。

一般に夢を抑圧された潜在意識の表出と見たり、歪められた衝動の表現型態の一つと見做したりするのが常であるが、殊に一世の師表と仰がれる明恵がこのように、ありのままを記録している態度には何ら病的な徴候は見出されない。高山寺文書の中の「上人御秘藏品目録」中にある「夢之自記」の奥書で、門弟の仁真が、これは先師（空達房）が上人から付属を被ったもので、当寺の重宝であると述べたあと、

殊御夢記、先師在世之時納箱底更無披露二者也。後代深得此意可秘藏也。

と断わり書きをしていることも、以上のごとき内容からして、尤も至極と思われる。持律者の行儀中、女犯が堅く戒められていた仏教界の風汐にあつては、高僧が、たとえ夢の内容であるとは言え、これらの事どもを紙に書き誌すことすら憚られたに違いないと想像される。にも拘らず明恵がこれらの事を率直に記したことは、逆に明恵の超俗的な境涯を物語っているとも言えよう。

明恵のこの行為は、宗教的世界においては非常に意義深いと考えられる。ある意味においては、これは懺悔・告白の行為に通ずる意味を帯びていると考えられるからである。これは、人の前ではなく、神・仏に対して、内心の煩惱の存在を認めることに等しく、懺悔と何ら変りはない意味をもつものである。これらの要素を醜惡なもの、あつてはならないものと考え、排斥的な態度をとり続ける限り、その陰に廻った要素は、現実の精神を圧迫し、病的、あるいは不健全ならしめる方向に作用するからである。明恵にとって、『夢記』を書き続ける習慣は、そのまま、精神の健全性を保持するための不可欠な行でもあったのであろう。